様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月１０日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０７１８
研究課題名（和文）　1970 年代以降の日本における性教育の実態とその有効性に関する研究

研究課題名（英文）　A Study about the Actual Situation of Sexuality Education and its Effectiveness in Japan after 1970's

研究代表者
田代　美江子　（TASHIRO　Mieko）
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：４０２９７０４９

研究成果の概要（和文）：成果の第 1 は、1970 年代以降の性教育の動向をふまえたうえで、性教育研究グループの会員を対象とした量的調査によって、現在の性教育実践の実態とその課題を明らかにしたことである。第 2 に、性教育実践の有効性を検証する方法を検討し、具体的な実践と結びついた形で、生徒への事前事後調査、インタビュー、感想分析などを行うことによって、性教育の効果を実証的に提示した。第 3 に、第 2 の成果を、授業研究、教材開発に結びつけ、実際に中学生および高校生の性教育プログラムを作成した。

研究成果の概要（英文）：The first result is to have clarified the actual situation of the current Sexuality Education practice and its problems by quantitative investigation for the member of the Council for Education and Study on Human Sexuality on the basis of a trend of Sexuality Education after 1970's. Second, we examined a method to inspect the effectiveness of the Sexuality Education practice and showed an effect of the Sexuality Education substantially by pre/post-questionnaire and interview to the students, analysis of the descriptions of their impressions. Third, we made the Sexuality Education program for junior high and high school students.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００８年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| ２００９年度 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |
| ２０１０年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：性教育、ジェンダー、セクシュアリティ

１．研究開始当初の背景

（1）1970 年代以降の性教育を問題にする背景として、1970 年代が「純潔教育」から「性教育」の実質的な転換時期だということがあげられる。今日的な性教育の理論と実態、その課題を解明するためには、この歴史的過程を視野に入れることは不可欠である。

（2）性教育を問題にする背景として、性教育の不在を含む、今日の子ども・若者を取り巻く劣悪な性的環境の問題があげられる。日本は先進諸国の中でも HIV/AIDS が増加している数少ない国であり、若年層の性感染症も急増している。それにもかかわらず、学校教育における性教育の位置づけの曖昧さ、性教育に関する情報の不足などに加え、特に 2000 年以降、学校の性教育に対する抑圧・規制も

強まっているというのが日本の状況である。劣悪な性的環境の中、子ども・若者が性的無知のままに置かれているというのが日本の現実であり、これは、国際的には性的権利の一つとして認知されている性の学習権を侵害する状況ともいえる。このような状況を打破するためにも、現在の性教育実践の到達点と課題について分析・考察し、性教育実践の有効性を実証的に明らかにすることは、急務の課題だといえる。

２．研究の目的

本研究の具体的な目的は以下の３点である。

(1) 1970 年代以降における日本の性教育の理論と実態を歴史的な視点から解明する。

(2) (1)での分析を基礎に、これまで性教育実践に積極的に取り組んできた教員の協力を得ることにより、量的・質的調査の両面から現在の性教育実践の具体的内容、その到達点と課題について分析・考察する。

(3) さらにその性教育実践の有効性について、生徒を対象とした調査、性教育実践への参与観察、既存の調査との比較などによって明らかにし、性教育の必要性について実証的に明らかにする。

以上の具体的目的を達成することにより、現在の子ども・若者の現実に即した性教育の具体的課題と展望を提示したい。

３．研究の方法

(1)1970 年代以降における性教育の動向

研究目的１、1970 年代以降における日本の性教育の変遷、その理論と実態の解明に就いては、2009 年度に実施の量的・質的調査遂行の前提作業に位置付くものである。具体的な方法としては、史資料の収集による文献研究と、70 年代以降、特に性教育研究団体、組織に関わってきた人物、その当時から性教育実践に取り組んでいた教員への聞き書き調査を実施する。また、保健体育科の問題や学習指導要領の改訂など、性教育をめぐる制度的な変遷についても押さえることによって、現在の性教育実践の到達点とその問題点、課題について解明する。

(2)研究目的 2 に該当する性教育の実態についての量的調査については、全国に会員を持つ日本で唯一の民間性教育研究団体である“人間と性”教育研究協議会の協力を得、質問紙調査を実施する。また、この調査によって、協力を得られることが確認できた教員への聞き書き調査を実施する。

(3)研究目的 3 の性教育実践の有効性に就いては、性教育野実践経験のある教員との協力関係の中で、教材研究、授業実践、生徒を対象とする性教育の授業の事前事後調査、インタビュー調査などにより、その有効性および、より効果的な性教育実践の方法を探る。

４．研究成果

(1)日本における性教育の実態―性教育に関心のある教員を対象とした実態調査―

① 目的

本研究の目的のひとつは、日本の性教育実践がどのような状況にあるのかを具体的に明らかにし、さらに、日本における性教育の課題を浮き彫りにすることである。そのため、1970 年代以降における性教育の動向を踏まえ、日本の性教育実践に大きな役割を果たした性教協の会員を対象に量的調査を実施した。

② 調査の対象と方法

性教育の研究団体である性教協に所属する会員を対象とし、量的調査を実施した。対象者は、少なくとも性教育に関心があり、性教育実践に取り組む教員も少なくない。調査の大きな枠組みは、①属性、②学校の性教育について、③調査者個人レベルでの性教育への取り組み、④性教育に対する認識とした。

各地域のサークル宛に調査票を送付した関係で、配布数にはいくらかの幅があるが、約 850 の調査票を配布し 344 を回収、回収率 40.5％であった。統計的分析には SPSS ver17.0j を用いた。

③ 日本における性教育の課題

本調査で明らかになった性教育の課題は以下の５点であった。

第１は、性教育のための時間の確保の問題である。本調査の結果からも、時間の確保が性教育実践においてもっとも大きな課題になっていることが明らかになった。これは、性教育が公的なカリキュラムに位置付いていないことが原因でもあるが、本調査の結果からは、性教育に比較的熱心に取り組んでいる場合、性教育は教科教育よりも、学級活動などが活用されていること、また、総合的な学習の時間が性教育実践において重要な位置を占めていることが確認できた。

第２に、時間数の問題と密接に関わるが、性教育の内容をどのように組み立てていくのかという課題である。つまり、限られた時間の中で、性教育をどのように効率よく実践していくのか、子どもたちに必要不可欠の情報をどのように選定していくのかということが問題となる。本調査では、性教育の内容に関して、小中高校の学校段階別に内容の偏りが見られた。もちろんこれらは、学習指導要領や各教科における性教育に関連する内容を反映するものでもあるが、現場の教員が、その段階の子ども・生徒にどういった知識が必要であるかといった一定の判断の反映でもある。こうした現場の状況を反映させながら、性教育を構築していくことが重要である。本調査の自由記述

では、「性教育は人権教育である」「人間関係を学ぶ教育である」といった認識が多く見られたが、性教育が、生殖と関わる部分だけで認識されていることは多く、性教育への攻撃がまかりとおってしまう背景には、性教育への貧困な理解がある。性教育とは何かという基本的なところから丁寧にとらえ直す必要性があるだろう。

第3に、性教育の内容に関わる情報提供についてである。今回の調査対象となった性教協のメンバーである教員は、他の教員に比較し、性教育を実践するにあたっての情報を入手しやすい環境にあると考えられる。教科書よりも他の教材を利用している率が高いことからも、その状況は推測できる。実際、他の中学校調査ではわずか6.8%であった「性の多様性」の内容は、今回の調査では、21.1%もの教員が取り組んでいる。この大きな差は、「性の多様性」の問題が、性教協のメンバーが共有する情報においては当然のこととして扱われているからであり、逆に、一般の教員にとっては知る機会が限られているということになる。教員自身に性教育実践の手助けとなる情報をどう提供していくのかということは、性教育への取り組みの動機にも大きく影響する重要な課題である。

第4に、性教育の担い手の問題である。本調査の特徴は、性教育に対して興味関心が高く、比較的熱心に取り組んでいると考えられる教員を対象としていることにある。その会員に養護教諭、女性教員が多いという結果は、性教育への取り組みにおいて、養護教諭および女性教員が重要な役割を果たしているということである。性教育の中心が女性であるという問題は、性教育が「産む性」と関わる問題としてだけ認識されがちだという問題点とも関連しており、性教育の内容に関わる問題でもある。一方、性教育が実践される場として「保健体育」は重要な教科となっていることも明らかになっている。いうまでもなく、保健体育科は多くの男性教員によって担われている。こういった点からも、男性教員による性教育実践の推進がひとつの大きな課題になると考えられる。

第5に、性教育を実践するにあたっての、連携、仲間作りの問題である。本調査においても、性教育に取り組んだ理由として、「一緒に取り組む仲間がいたから」と答えた者が4分の1を占めていた。また、性教育の担い手として養護教員が重要な位置を占めているということとも関連する。実際、性教育に取り組んでいる養護教諭の約86%が、担任と連携し性教育に取り組んでいる結果からも、養護教諭が性教育実践に大きな役割を果たし、影響を及ぼしていることは明らかである。全校の子どもたちの健康状態を把握する立場にある養護教諭が、性教育についての知識・情報を確実に獲得できるような機会を保障することが、性教育を推進する力になると考えられる。

（２）性教育の「有効性」を検証する試み

① はじめに

上記の実態調査からも明らかなように、性教育実践における問題点の第一は「時間の確保」であった。こうした問題を乗り越えていくためには、性教育の必要性や効果を幅広く、より具体的に提示していくことが重要であると考えられる。本研究では、実践の「有効性」を検証する方法として、先行研究等をふまえた議論を重ねたうえで、①授業の内容にそった事前・事後調査、②生徒へのインタビュー、③授業の感想分析を試みることにした。実践の“成果”を明らかにしようとするとき、それは当然ながら授業を担当した教員が授業を省察的に振り返るという作業が同時に生ずる。従って、こうした試みは、必然的に授業研究、教材研究につながるものとなる。

ここでは、K市の中学校でK先生の実践の中で試みた授業の事前・事後調査の結果を中心にその結果を報告する。なお、事前事後調査の項目の妥当性などについては、3年間にわたって継続的に実施してきた。実際に検討した授業のテーマは、「対等な人間関係」「多様なセクシュアリティ①②」であるが、ここでは、「対等な人間関係」の結果のみを示す。

② 「対等な人間関係」の授業

〈全体の流れ〉

事前調査 2008/6/15、6/28→保護者へ「性教育だより」の配布（授業日時、学年、目的、担当者、学習指導案・配布資料）→授業実施 2008/7/4→保護者へ「性教育だより」の配布（量的調査結果の報告、生徒の感想文）→事後調査 2008/8/29

〈授業の目的〉

ⅰ）人間関係で大切なことは対等で尊重し合える関係であることに気づくこと

ⅱ）対等で尊重し合える関係とはどのような関係をいうのかを考え、その関係づくりのための具体的方法について知ること

〈事前事後調査項目〉

まず導入で事前調査の結果を確認し、恋愛に関する友だちの考え方を知ることとした。ここで提示した事前事後調査の項目は、以下の通りである。

ⅰ)好きな人がいるか

ⅱ)異性の友だちはどんな人がいいか

ⅲ)同性の友だちはどんな人がいいか

ⅳ)好きな人ができたら告白するか

ⅴ)付き合ってほしいと言われたらどうするか

vi)中学生が付き合うことについて許容できる行動はどれか

ここでの「好きな人」という表現には同性愛も含まれることや恋愛をしなくてもよいことについてふれ、いろいろな考え方があることを確認した

その上で、恋愛に関する事例をもとに、グループごとの話し合いなどを経て、相手の行動を抑制したり、支配する関係は対等な関係ではないことを確認した。さらにそこから「デートDV」という状況に発展することもあることや、対等な関係を作るコミュニケーション方法についても提案した。また、恋愛について多くの情報があるが、そこにはない情報として、自分のペースでゆっくりでいいこと、好きな人がいても告白しなくてもOK、片思いも素敵、同性を好きになってもOK、誰も好きにならなくても OK だということを確認して本時のまとめとし、最後に感想を書くように用紙を配布した。

〈事前－事後調査の結果(一部)〉

「①あなたは好きな人がいますか」という項目に関しては、事後調査では好きな人が「いない」率が増えている。「いる」場合、「つきあいたいと思っている」率は大幅に減少している。これは授業の中で、雑誌等でも、好きな人ができる→告る→つきあう→キス→…というようなパターン化された関係性が描かれていることが多いことに言及したこと、好きな人がいてもいなくても良いというように関係性のあり方が幅広くて良いというトーンでの語りかけをしていたのが現れているのではないかと考えられる。これは「④好きな人ができたら告白しますか」という問いで「しない」率が上昇したこと、「⑤つきあってほしいと言われたら…」で「特に嫌いではないのでとりあえずつきあってみる」が減少したのも同様のことが言える。

「⑥中学生がつきあうとは…」では、事前－事後調査のいずれも「早すぎる」という意見は10%代であり、実際につきあう／つきあわないに関わらず、誰かとつきあうことを中学生が身近なこととして捉えている傾向があることがわかる。具体的には「話をする」「メールや交換日記」が多くみられます。事後調査では「デートをする」「手をつなぐ」「キスする」「性行為する」のいずれも減少している。「⑧つきあっている人がいる場合、嫉妬されたいですか」については、事後調査では「嫉妬されたくない」という答えが増えている。

「⑨デート DV を知っているか」では、事前調査では「知っている」が20%代だったのが、事後調査では大幅には増加したが70%にとどまっている。これについては「デートDV」を定義づけて教えるというのではなく、カップルの事例から、「もしあなただったらどうしますか、どう思うか」、「キライでなければキスを避けるべきではないのか」について考えさせ、自分の感覚を大事にした上で意見を出し合うようにし、その上でデート DV の説明と、大切に思っているつもりでもデートDVにつながっていくこともあるということにつなげるようにした授業の流れとも関連していると考えられる。

③ おわりに

生徒たちの多くは、中学生に人気のファッション雑誌、コミック、携帯小説などから、「恋愛」や性に関する情報を得ており、少なからず影響を受けている。そうした情報のほとんどは、「彼氏、彼女」がいること、「つきあう」＝性行動という図式を当然のこととしている。上記で示した授業は、こうした情報と異なる価値観を提示することにもなっている。事前事後調査の比較から、生徒自身が（焦らなくてもいいのだと）安心し、性行動に対してより慎重になっている状況がわかる。これは、「性教育によって性行動が活発になる」といった偏見を否定するものとして重要な結果である。

ただし、事後調査の場合はとくに、授業担当者が期待する回答を読み取って答える生徒がいることもあり、“タテマエ”“キレイゴト”の感想であって本音は別のところにあるというような受け止め方になっていないか、自分に関わるテーマであると捉えられているかを慎重にとらえる必要がある。指導者側としては、意図に沿った感想は喜ばしく、次への原動力にもなるが、内容を省察的に捉え、丁寧に見ていく必要があると考えられる。

また、上記の授業では、授業から約２ヶ月後に事後調査を実施したが、生徒の知識の定着度および意識の変化をある程度客観的に測定するためには、どの段階で事後調査を実施するのが適切であるのかについて、さらに検討する必要がある。

（３）事前事後調査をふまえた授業づくり

① 本研究の目的および特徴

（２）の実践の「有効性」を検証する試みを発展させ、「多様なセクシュアリティ」をテーマとする授業研究をおこなった。具体的には、「性の多様性」について、子どもたちが人ごとではなく自らの問題としてとらえることのできる授業づくりを大きな目的とした。

このテーマの授業研究を深めた背景には、現在、セクシュアルマイノリティの存在は以前よりも可視化され、学校の中でもセクシュアルマイノリティの子どもたちがいるという理解と認識が広まりつつあるという状況がある。これは、文科省が「性同一性障害」の児童・生徒への配慮を学校現場に通達を出したことにもあらわれている。当事者の子どもにとってはもちろん、すべての子どもたち

が、人権の問題として「性の多様性」について学習することは必要であるにもかかわらず、「性の多様性」についての実践は、ほとんど行われていないということが、本研究の調査においても明らかになっている。こうした状況をふまえ、「性の多様性」をテーマとした授業実践のモデルケースの検討を行った。

本授業実践の大きな特徴は、事前・事後アンケートによって知識の獲得および意識の変化といった観点から授業の成果を確認するとともに、生徒有志による座談会の場を持ち、授業の感想や意見を率直に出してもらった上で、それらを踏まえて授業目標および構成、教材を改変していったことにある。このようなプロセスは授業づくりという実践において非常に重要な視点を示してくれる。

まず学習者の変化の実態を把握することの重要性である。これによって、指導方法だけではなく、授業の必要性自体を反省的に確認することができ、授業のつくりなおし、ブラッシュアップを可能とする。またもうひとつは、生徒の声を大切にすることの重要性である。本研究では生徒有志による座談会の場を創出し、そこから多くの反省点や生徒が知りたいと考える視点を得ることができた。本研究ではこの座談会から、教員自身の「当事者性」の自覚の重要性や、生徒の実態を把握することの重要性、そして授業のさらなる課題に気づくことができた。つまり、子どもたちが授業に対して自分たちの意見を表明できる機会の保障が重要となるのである。

② 授業の概要

〈実践校について〉

本授業研究の実践校は京都市内南部の比較的閑静な住宅地に位置する生徒数約 400 人の中規模校である。保護者の多くは会社員で教育熱心、生徒は比較的柔順で成績に敏感である。「生徒一人ひとりの個性を尊重し、豊かな情操を培うとともに、社会や人との関わりの中で主体的に学ぶ生徒の育成」という教育方針のもと、各教科ともに熱心に教育研究に取り組んでいる。

〈これまでの性教育と「性の多様性」の位置づけ〉

生徒が「主体的に判断し、自立して生きていける力を身につける」ことを目標に、科学、人権、自立、共生を基盤に据え、時代の動きや生徒の実態も加味しながら実践を重ねてきた。現在は 3 学年共に学活の時間に 3 年間で 6 時間実施している。取り扱うテーマは第１学年「生命の誕生」（1 時間）、「思春期の心」（1 時間）、第 2 学年「対等な人間関係」（1 時間）、第 3 学年「性の多様性」（2 時間）、「避妊と中絶」（1 時間）である。「性の多様性」の授業は第 3 学年を対象に 2001 年度から実践している。

③ 授業づくり・実践を通して明らかになった課題

授業づくりにおいて、特にテーマとの関連で「当事者をゲストに呼ぶことの効果と課題」および「学習・教育における『当事者性』」といった点について着目しながら、授業づくりをすすめた。その中で明らかになった課題は以下の 4 点である。

第 1 に教材の工夫である。「性の多様性」を自分のこととして考えるためには、セクシュアルマイノリティについての知識を身につけるだけではなく、いかに自分がこの性の多様性の中に位置づいているかということを認識しなければならない。本授業ではさまざまな性の有り様を樹形図として概念化したものを使用したり、映像資料で説明されるスケール図を用いて説明したが、自分の性の揺らぎや曖昧さについてじっくりと考えられる教材の工夫が必要である

第 2 に、セクシュアルマイノリティ当事者も多様であることの保障である。本授業の１年目ではセクシュアルマイノリティ当事者の複数性を担保するために、ゲイと性同一性障害の人といった複数の異なった当事者を映像資料で登場させたが、２年目は生徒の要求から実際に当事者を呼ぶこととなった。ここでは一人の当事者の姿が提示されることとなった。このことは前述の通り大きな効果を持つものだったが、その分、セクシュアルマイノリティに対するイメージがその個人に収斂されてしまう可能性がある。したがって、今後継続的にその多様性を示していく作業が必要となる。

第 3 に、「当事者性」を意識した発問の工夫である。本授業ではドラマ映像資料を用いた際に、生徒が登場人物の祖母を説得することに意識が向いていることに気づいた。説得の方法は映像資料には提示されておらず、そこから生徒たち自身が思考しなければならない。また、そのことを考えることは、今後自分がそのような場面（誰かにセクシュアリティをカミングアウトされる）に直面したときの行動の変容を促すことにつながると考える。したがって、このことを思考させる発問に変更することで、より授業の効果を上げることが可能となるのではないかと予想される。

第 4 に、本授業のテーマにおいて、カミングアウトという行為をどのように位置づけるかである。本授業では、映像資料（ドキュメント、ドラマともに）も当事者であるゲスト講師も自己のセクシュアリティをカミングアウトしている。したがって、マイノリティがカミングアウトすることが望ましいことであるといった印象を与えかねない。しかしカミングアウトという行為は、さまざまな要因が複雑に絡んでいる環境および関係性の中で、する／しないを自己決定するもので

ある。また、カミングアウトをしたいと思ったときにできないという状況が問題であり、安心してできる環境をつくっていくことも求められる。この点についてより理解を深めるための工夫も必要となろう。

本研究で取り扱った「性の多様性」というテーマの授業実践の成果は、いま積み上げられはじめたばかりである。教員と研究者との共同作業の中で学習者である生徒たちの声を十分聞く機会を保障し、より効果的な授業づくりを継続していかなければならない。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）


① 田代美江子、艮香織、渡辺大輔、The Actual Situation of Sexuality Education in Japan and its Problems：Fact-finding for teachers interested in Sexuality Education、埼玉大学紀要.教育学部、査読無、60-1、2011、9-22
② 渡辺大輔、楠裕子、田代美江子、艮香織、中学校における「性の多様性」理解のための授業づくり、埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、査読無、10、2011、97-104
③ 艮香織、性教育の成果を積みあげよう、季刊セクシュアリティ、査読無、49、2011、116-124
④ 楠裕子、渡辺大輔、艮香織、田代美江子、「多様なセクシュアリティ」の授業、季刊セクシュアリティ、査読無、50、2011、36-45
⑤ 艮香織、家庭科におけるジェンダー/セクシュアリティに関わる教育実践の現状と課題―高校生と家庭科教師を対象とした調査から―、日本家庭科教育学会誌、査読有、153-2、2010、71-81
⑥ 田代美江子、艮香織、渡辺大輔、村瀬幸浩、関口久志、浅井春男、サヨナラ性暴力ーキャンパスライフにおける性暴力防止のために（教材パンフレット）、季刊セクシュアリティ、査読無、44、2010、1-24
⑦ 艮香織、性教育の実態に関する調査―文部科学省科学研究費研究〈1970年代以降の日本における性教育の実態とその有効性に関する研究：研究代表者・田代美江子〉の一環として実施した量的調査の結果（一部）報告、季刊セクシュアリティ、査読無、42、2009、108-113
⑧ 渡辺大輔、子どもの現実をみつめ、いま性教育にできること―希望をひらくつながりを―、“人間と性”教育研究協議会第27回全国夏期セミナー資料、査読無、2008、9-18
⑨ 田代美江子、子どもを大切にする構想―性教育からのアプローチ―、季刊セクシュアリティ、査読無、2008、4-17


〔学会発表〕（計４件）


① 田代美江子、Current Situation of Sexuality Education in Japan and its Problems、スペイン科学高等学院人間社会科学センターセミナー、2011年３月８日、スペイン科学研究高等会議(スペイン、マドリッド)
② 田代美江子、艮　香織、渡辺大輔、日本における性教育の実態―性教育に関心のある教員を対象とした実践調査―、日本教育学会、2009年８月29日、東京大学（東京、日本）
③ 艮香織、家庭科におけるジェンダー/セクシュアリティ教育の現状と課題―高校生と家庭科教師の調査から―、日本教育学会、2009年８月29日、東京大学（東京、日本）
④ 田代美江子、日本の子ども・若者を取り巻く性的環境と性教育、2008韓国と日本の性教育セミナー―韓・日十代の性文化と性教育の戦略―、2008年８月23日、韓国労総会館大講堂(韓国、ソウル)


〔図書〕（計３件）


① Lori Beckett編、
② 監訳：橋本紀子、訳：艮香織、渡辺大輔、小宮明彦、杉田真衣、進化学出版社、みんな大切！―多様な性と教育―、2011、195
③ 浅井春夫、杉田　聡、村瀬幸浩、田代美江子　他６名、十月舎、性の貧困と希望としての性教育～その現実とこれからの課題～、2009、253


６．研究組織


(1)研究代表者
田代　美江子（TASHIRO Mieko）
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：４０２９７０４９
(2)研究分担者
艮　香織（USHITORA Kaori）
宇都宮大学・教育学部・講師
研究者番号：１０４５９２２４
渡辺　大輔（WATANABE Daisuke）
研究者番号：００４６８２２４